

私のフィールドワーク

内山田 康

フィールドでの生活

私は1992年から1993年にかけて十八ヶ月間、南インド、ケーララのヴェッティコードという村でフィールドワークを行ったことがある。その当時、私はロンドン経済政治学院(LSE)で社会人類学のドクター論文を書くためのフィールドワークを行っていた。ケーララをフィールドワークの場所として選んだことには、積極的な理由はなかった。それより三年前の1989年、イースト・アングリア大学で開発研究の博士課程の学生だった頃は、以前(1985年から1987年にかけて)NGOの仕事で働いたことがあるエチオピアでフィールドワークを行おうと思っていた。しかし二つの理由でエチオピア行きは断念した。一つ目の理由は、エチオピアにおける内戦の激化だった。当時、私は、アジス・アベバ大学の客員研究員の資格を得て、フィールドワークをすることになっていたが、出発前に調査予定地が解放戦線側に陥落して、大学とも連絡が取れなくなってしまった。もう一つは、当てにしていたNGOの私の後任が、私がNGOの仲間としてではなく、ドクター論文を書くためのデータを集めるために戻ってくることに對して腹を立て、協力を拒否されたことだった。Ph.D.を取るという個人的な理由でフィールドに帰ってこようとしたことが許せなかったようだ。しかしこの点は重要である。現地である目的を持って働いていた同僚だけではない。そこに住む多くの人たちはなお更のこと、Ph.D.を書くためにフィールドに入ってきたよそ者に、何をしにきたのかと彼/女が、帰るまで聞きつづけるだろう。

その後は、何とかPh.D.を終わらせたい一心で、新潟県の月潟村の「料理屋」と呼ばれる芸者置き屋に、妻と生後三ヶ月の長男と住みながら調査を始めた。しかし、今度は別の三つの理由で、調査を中断した。第一の理由はお金に関わるものだった。エチオピアでのフィールドワークで使うための研究助成をある財団から得ていたのだが、エチオピアに行けなくなったので、その研究助成は返さなければならなかった。また新たに奨学金を獲得していたが、その奨学金は海外でしか使えないものだった。だから月潟村にいればいるほど借金は増えていった。第二の理由は、準備不足だった。エチオピアでの調査のために

積み重ねてきた準備は、月潟村には使えるとは思えなかった。第三の理由は、博士論文の指導教授が、イースト・アングリア大学を去り、LSEへ移ってしまったことだった。大学からあてがわれた新しい指導教授とは方法論で意見が合わなかった。LSEに移った最初の指導教授は人類学者だった。次の指導教授は経済学者だった。彼は、お前のPh.D.論文の枠組みは良くないから、私の言うように変えろ、と言うのだったが、システム理論でリサーチをするなど論外だと思われた。イースト・アングリア大学を辞めてLSEに移り、社会人類学のPh.D.を初めからやり直すことにした。

LSEで再びフィールドワークの準備をして、妻と一歳七ヶ月の長男を伴って1992年2月にケーララにやってきた。エティオピアで働いていた頃は独身だった。ウェールズで修士課程を終え、博士課程に進むときに結婚した。翌年長男が生まれ、次第に内戦や衛生面で問題がある場所に家族を伴ってフィールドワークに出かけることは難しいと考えるようになっていた。移った先のLSEのDepartment of Anthropologyではインドでフィールドワークをすることを勧められた。指導教授が三人 (John Harriss, Chris Fuller, Jonathan Parry) ともインドをフィールドとしていたからだ。インドの中ではケーララの乳児死亡率が最も低く、妻と幼児を連れている私にとってケーララが最も適当なフィールドだと皆は結論した。しかしフィールドワークの調査許可がなかなか降りないまま、半年が過ぎた。三度目の試みだったので次第に本当にフィールドにいけるのだろうか、もっと簡単に調査許可が取れそうな国に変えようかとも考えたりもした。顔見知りだったインド出身の経済学の教授で英国貴族院の議員でもあったマグネット・デサイ卿に調査許可のことを頼んだところ、その日のうちにインド内務省の大臣にファックスを送ってくれた。調査許可は翌日取れた。

ケーララをフィールドとして選んだのは、だから私自身の意図との関係で言うと消極的理由による。このことは、フィールドワーカーがフィールドにたどり着くまで、調査資金、調査許可、調査地選び、住む家の選択など、どれを取っても一人で自律的に決定できないこと、ネットワークの中にある位置を持っていて、そのネットワークの「結び目」の部分がどう働くかということが、実際に何をどう行うことが出来たかに重大な影響を与えていることを教えてくれた。このネットワークの働きは、データそのものにも影を落としている。

こうしてようやくケーララでのフィールドワークが可能になった。私にとってケーララは不慣れな所ではなかった。子供の頃、約二年間セイロン（今のスリランカ）に住んだこと

があり、ケーララの景観も、人びとも、食べ物も、匂いも、音も、ものの形も、懐かしく感じられた。後に理解するのだが、スリランカとケーララの間には実は長い交流の歴史があった。だからエチオピアの北部の高原や月潟村を経てケーララにやって来て、カルチャーショックを受けることはなかった。しかし、バリとハワイに観光旅行した以外は、非西欧社会に来るのが初めてだった妻にとっては驚くことばかりだったようだ。ロンドンからケーララへやってきて、トリヴァンドラムの空港から市内へ向かう道路で、タクシーが近づいても寝そべったままの牛に遭遇して「きゃーっ」と叫び、貧しい身なりの人たちがふらふら歩いているのを見ると、驚きの声を上げた。

それから約三ヶ月の間、私はトリヴァンドラムでマラヤラム語の勉強をしながらフィールドワークをする場所を探した。自炊が出来る長期滞在者用の宿に住んだが、停電が多く持っていったコンピュータは使えないことが多かった。5月の終わりのモンスーンが始まるころにヴェッティコードに移り住んだ。ヴェッティコードで最も大きなコロニアル風のバンガローの二部屋を間借りして、一つを勉強部屋、もう一つを寝室として使った。家主は大金持のシリア派キリスト教徒で、庭は広く、またバンガローで保育園を経営していたので、子連れの内々には良いところかもしれないと思ったからだ。そのバンガローの庭は高い壁で囲まれていた。奥さんは、周りに住む貧しい不可触民たちはどろぼうだから門にはいつも鍵をかけておくように、と妻と私に注意した。人類学者がバンガローに閉じこもっていても仕事にならない。もし独りで来ていたらあのバンガローには決して住まなかっただろう。実は他に住みたい家があったのだが、妻はそこが汚い上、寂しいところだったので、住めないと思ったようなので断念した。フィールドに妻と子供と共にいったことが、私のフィールドワークでの種々の選択に決定的に作用していた。夫婦でフィールドワークに行った多くのカップルが離婚していることが思い出された。結局、そのバンガローに住み、門には鍵をかけず、不可触民たちを招いたりしたので、家主との関係は冷えたものになった。

子供も大変だった、二歳の誕生日を過ぎたころ長男は原因不明の高熱が続いた。トリヴァンドラムの病院に入院させて、大学病院で検査を受けたが、抗生物質をくれるだけで、子供の病状は悪化していった。2週間40度前後の高熱が続き、彼はやせ細り、歩くことも出来なくなり、這い這いしか出来ないほど弱ってしまった。その時の妻の泣きそうな顔は今でも忘れることが出来ない。それは8月の下旬だった。ヴェッティコードには二ヶ月居ただけで子供は病気にかかり、妻と私はトリヴァンドラムの病院で寝泊まりしていた。たまたまニューヨークから帰っていたナーヤルの女医から、あなたの子供は川崎病にかかって

いるのですぐに日本に返した方が良いとのアドバイスを受けた。その医師はガンマグロブリンを投与した。熱が下がった時を見計らって、長男は妻とともに日本に帰って行った。長男は日本で緊急入院して二週間で退院することが出来た。日本の病院で妻はあのナーヤルの医師の処置が良かったから助かったと言われたそうだ。彼は今元気でサッカーをやり、算数とゲームボーイに凝っている。

さて、最初の数ヶ月はフィールドで生活すること自体が大変だった。私は、家の裏に住む貧しい不可触民たちについて調査していたので、貧しい生活を家族にも強いてしまった。近所のミドルクラスの人たちが持っていたプロパンガスのコンロ、冷蔵庫、テレビ、スクーターも持たず、召し使いも使わず、台所として使っていたベランダには石油コンロが一つあるだけだった。石油も手に入らないことが多く、妻は木の枝や枯れ草を集め、庭に置いた三つの石の上で食事の用意をすることもあった。病気で日本に帰っていた長男と妻はクリスマス前に戻ってきた。妻は一年を過ぎる頃から次第にケーララの生活にも慣れ始めた。妻が友達から聞いてきた話は貴重なデータにもなった。妻と子供を仲介して、もし独りで来ていたら決して知り合いにならなかっただろうと思われる人びともあちこちで立ち話をする関係になっていた。

あの頃は日々の生活を送ることに膨大なエネルギーを使っていた。妻は、野菜、米、魚などをヴェッティコードの普通かそれより貧しい人びとと同じようにマーケットに買いに行き、あちこちでおしゃべりをしながら帰ってきた。私はヴェッティコードに来てから最初の半年は午前中にマラヤラム語の勉強、午後はぶらぶら歩き回り、ありとあらゆること、例えば、地主と労働者たちの労働争議、親族関係、結婚式、葬式、政治集会、農作業、ヒンドゥー寺院の儀礼、下級役人と役所へやってきた人びとのやりとり、近所の不可触民たちの生活などを見たり聞いたりしていた。最初の頃は、月に一度、バスに乗ってトリヴァンドラムやアリペイ、時にはコーチンへ行き、ホテルで何泊かしてから帰ってきた。フィールドワークにはアフターファイヴも週末も無かったから、月に一度の休暇が待ち遠しかった。帰国まで半年を切る頃になると、データの収集に忙しくなったことと、私も妻もヴェッティコードでの生活に慣れたこともあって、息抜きでヴェッティコードを出るのは二ヶ月か三ヶ月に一度程度になっていった。

このように、私のフィールドワークは決して楽しいものではなかった。フィールドワークの面白さは、フィールドでの楽しい生活にではなく、フィールドに行かなければ決して分

らなかったことが、時間をかけた参与観察と、そこに住む人たちとの長い対話を通して徐々に明らかになって行く過程を経験するところにあった。LSEからはもう一人*Ph.D.*の学生がフィールドワークをするためにケララに来ていた。彼女はケンブリッジ大学で人類学を学んだ後、LSEで研究をする1学年上のイギリス人だった。彼女は、フィールドワークをしている筈の村へは行かず、トリヴァンドラムでぶらぶらしていたが、フィールドワークの孤独と退屈に耐え切れず、予定を切り上げてイギリスへ帰ってしまった。人類学者は自分の国に帰ると、ずいぶん勇ましいことを言うことが多いけれど、フィールドワークの実際は、そんなにかっこいいものではないと思う。

参与観察と反照のループ通して見えてきた景観と社会関係

フィールドに行く前、人類学のドクターコースの学生たちはリサーチ・プロポーザルを書き、審査に合格しなければならなかった。これは論理的に矛盾した演習だった。フィールドで長期の参与観察によってしか理解できない社会現象、出来事、行為、意味などについて、前もって知っているかのように、研究の枠組みを書くのである。だから、リサーチ・プロポーザルは、文献レビューを通して構築されたフィールドの「紙の事実」、それを前提とした反人類学的な実証主義的方法論、もっともらしい人類学的味付け、あるいは飾り付けから成り立っていた。1991年の暮れの頃だったと思うが、1997年1月に五十一歳の若さで亡くなったアルフレッド・ジェルに「プロポーザルは形式的なものだ。フィールドに一旦入ったら捨ててしまうものだから、そう思って書けば良い。僕自身パプアニューギニアでプロポーザルを捨てて、全く違うことをやった。」と言われ、この矛盾もさほど気にする必要が無いことを知ってから、一気にそれらしいプロポーザルを書き上げた。フィールドワークを始めてからは、ジェルが言うようにリサーチ・プロポーザルを捨てるのはいつだろうと考えたが、「紙の事実」を覆すような発見も無いまま一年が過ぎた。

プロポーザルで問題としたのは、いわゆる「ケララの奇跡」を可能にしている文化構築は何かだった。発想は非常に単純である。ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と同じような発想で、工業化が遅れているにも係わらず、識字率が高く、乳児死亡率が低く、農地改革を成功させた「ケララの奇跡」を可能にした主要な文化構築（文化的ファクターと言うとより素人っぽくなってしまい、人類学のプロポーザルとしては不合格になったかもしれない。）は何かという問いである。当時、近いうちに経済学でノーベル賞を取るだろうと噂されていたアマルティア・センなどが盛んに言及していた「ケララの奇跡」は、プロポーザルの中では、文化を発展の原因と考えるウェーバー流

の発想方法と共に、出発点、あるいはブラックボックスとなっていた。フィールドで不可触民たちと長い対話を続けるうちに、「ケーララの奇跡」が唯一不変の事実ではなく、数多くある事実の内の一つであることがわかってきた。言い換えると「ケーララの奇跡」はある特定の言説内の事実ではあるが、別の言説内では作り事であると理解されていることがわかった。「ケーララの奇跡」自体がひとつの文化構築であるということだ。

「農地改革によって土地なしが土地持ちになった」という議論では、そもそも何を根拠として土地の所有権を認めるかについての議論がされていなかった。そこでは土地台帳に地主として書かれている名前の持ち主が土地持ちであると自動的に理解されていた。土地台帳が人と土地の関係を証明する唯一のものではないことは知ったのは、ずいぶん後のことだった。フィールドに入ってしばらくは、「農地改革によって土地を失った」という農地改革で土地を得たことになっている人びとの言っていることがさっぱり理解できなかった。そのデータを分析の枠組みの中で使おうとはしなかった。後になってから、実証主義的態度の限界は、仮説に合わないデータをさりげなく無視することにあると考えようになったが、その時は、不可触民のインフォーマントたちが、何か訳の分からないことを言っていると思い込んでいて、こちら側が、訳の分っていない枠組みを押し付けていることには気づいていなかった。それが分ってきたのはフィールドワークを始めて十四ヶ月が過ぎた頃だった。

「農地改革によって土地を失った」という近所の不可触民たちから何度も聞いていた話を、たわ言として捨てるのではなく、「農地改革によって土地を失った」という説明が意味を持つような枠組みを理解し、それを使って農地改革のロジックを考え直すという戦略で調査をすることに決めた。今までバラバラになっていた周縁の人びとの語りやイメージの断片が、全く別の意味ある全体を作り始めていた。ケーララのヒンドゥー教徒たちは死者を家の南がわにある畑で埋葬あるいは火葬する。土葬したあと、あるいは火葬したあとに残る穴に、ココナッツ、バナナ、米、麦、様々な豆類、マスタード、うこんなどを植える。まるで死者から毎日食べるものが生えてくるようなシンボリズムは、“*endo-cannibalism*” のようであると考えた。またケーララでは、祖先ハリネージの土地の中にあるカーヴと呼ばれる森に棲んでいることが解った。農地改革で土地を失い、私が住んでいた家の裏側に小さな小屋を建てて住んでいた不可触民たちは、近所に住む金貸しの家の裏にある彼らのカーヴとそれと対になった池を見せてくれた。土地台帳に記されていなくても彼らの祖先が棲むカーヴ、彼らの肉親たちが埋葬された土地が鉄条網の向こう側にあった。この金貸しの妻は長いこと「土地のたたり」として知られる憑依に苦しんでいた。彼女を苦しめて

いるのは追い出された不可触民たちの祖先であるということだった。このような話は何十回と聞いた。リサーチ・プロポーザルに書いたことを捨てる時が来た。私は一週間ほど部屋にこもり、ロンドンのクリス・フラーに送るための長いレポートを書いた。フラーは直ぐに返事をくれて、それは面白いからぜひやるようにと励ましてくれた。その頃は、妻も子供もフィールドに慣れてきていたし、私のマラヤラム語も上達していたので、この思い付きと指導教授の励ましによって、気力は充実していた。面白い調査を可能にするフィールドでの基礎を作るのに十四ヶ月かかったということだ。残りは四ヶ月しかなかったが、調査は順調に進んだ。新しいアイデアを近所に住むリサーチ・アシスタントのレグに説明すると面白がってくれたので、これは行けそうだと確信した。論文を書く上で最も良く使ったフィールドノートは、この期間に書かれたものだ。

1993年8月、十八ヶ月間のフィールドワークを終えロンドンに戻り、それから約二年間かけて博士論文を書き上げた。Ph.D.を取ったからといってケーララの不可触民たちのことが、良く理解できているとは考えていない。(1996年と1997年の再訪調査を通して、自分の思い込みによって見えないものが多いことを知った。)はっきり言えるのは、ジェルが言っていたリサーチ・プロポーザルをフィールドで捨てる契機が訪れたことだ。これを捨てる前と後では、ケーララの景観の見え方も、社会関係の見え方も大きく違う。それを可能にしたのは、時には耐え難いほど退屈だった参与観察、人びととの長い対話、そして必ずしも楽しくはなかったが、私たちをヴェッティコードの生活世界、あるいはフィールドへ行く前とは違ったハビタスへと導いた、毎日の生活だったと思われる。

しかし、生活をしているだけでは、ヴェッティコードの不可触民たちの生活世界に関する知識を獲得することは出来ない。それを可能にしたのは、モーリス・ブロックの次のようなアドバイスだった。「フィールドに行ったら毎日一人でセミナーをしなさい。問題を立てて、それに答える。セミナーでやるようにその答えに対する批判をする。その批判に答える…」この自問自答式のひとりセミナーを毎日のように昼食後と、夕食前にベランダでやった。昼食時と買い物とおしゃべりのために人びとがマーケットへ行く夕方は、人が最も訪ねて来ない時間帯だった。一方でヴェッティコードの生活世界へと入って行く動きをしながら、同時にそこから出てくる別の動きを昼食時と夕方のベランダという特別な場所を使ってやっていたのだった。ケーララの「景観」とか「社会関係」といった抽象化された社会の断面は、昼食の前後あるいは夕食前にベランダで考えられたものだ。ベランダで一人セミナーをした問題は、その日のうちか翌日には、インフォーマントに聞いたり、あるいはその問題が解けそうな場所へ出かけたりして答えようとした。そのような答えが

新たな疑問を生み出した。三ヶ月に一度は、ロンドンのスーパーバイザーに報告するために、四日から七日かけて資料を見直しながらい長いレポートを書いた。これも考えをまとめる上で大いに役立った。

ヴェッティコードを去る日に近所の不可触民たちが見送りに来た。見送りに来たついでに、私たちが置いて行くなべ、コップ、ブリキの箱、ごみ箱、たらいなどこまごまとしたものをもらい受けに来たとも言える。不可触民以外でそこにいたのは、家主夫婦、レグ、それにレグの父親だけだった。近所の不可触民たちが見送りに来てくれたことは嬉しかったが、それ以外の普通の人びとが見送りに来なかったことは、私がヴェッティコードでそれまでのような関係を作り上げていたかを反映していた。嬉しいような悲しいような気持ちだった。私は妻と息子と共に、裏の不可触民の若者が運転するタクシーに乗ってヴェッティコードを後にした。私がケーララの「景観」や「社会関係」について語るアングルは、このネットワーク上の主要な結び目、そしてネットワーク上の私の位置取りに深く関わっている。

(2000年2月4日)



1996年に下宿した大工だった故タンガッパンの家の前で。後方は隣の故バースカラン。

ケーララの人と場所の関係について書いた作品

1998. 'The grove is our temple.' Contested representations of Kaavu in South India. In Rival, R. (ed.) *The Social Life of Trees: Anthropological Perspectives on Tree Symbolism*. Oxford: Berg, pp.177-196.
1999. Two Beautiful Untouchable Women: Processes of Becoming in South India. In Day, S., E. Papataxiarchis and M. Stewart (eds.) *Lilies of the Field: Marginal People Who Live for the Moment*. Oxford and Boulder: Westview, pp.96-116.
1999. 「豊饒の死者：南インドの荒森」『講座 人間と環境 10 大地と神々の共生』昭和堂、116-136 頁。
1999. Soil, Self, Resistance: Late-modernity and locative spirit possession in Kerala. In Assayag, J. and G. Tarabout (eds.) *La Possession en Asie du Sud: Parole, Corps, Territoire* (Purushartha no.21). Paris: École des Hautes Études en Sciences Sociales, pp. 289-311.
2000. Passions in the Landscape: Ancestor spirit and land reforms in Kerala, India. *South Asia Research* 20(1): 63-84.
2001. Journeys to Watersheds: Ecology, Nation and Shifting Balance of Malayaalam. *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies* 13: 107-141.
2002. Projecting textual identities on the forest of Kuravas in Kerala. In Carrin, Marine and Jaffrelet Christoph (eds.) *Tribus et basses castes. Résistance et autonomie dans la société indienne* (Purushartha no.23). Paris: École des Hautes Études en Sciences Sociales, pp. 111-129.
2003. The dominant narratives of progress and artifactual landlessness in Kerala. *History and Anthropology* 31: 5-36.
2003. Parallel histories of ancestral land in Kerala. *History and Anthropology* 31: 37-70.
2003. 「開発の二つの記憶」『民族学研究』67 巻 4 号 450-477 頁。
2006. 「景観、顔、（上位の）符号」『公共研究』3 巻 2 号 88-108 頁。
2007. 「カトリーン・ゴフの小農と帝国主義」『歴史人類』36 号 145-161 頁。
2008. Transforming 'Sacred Groves'. In Carrin, Marine and Harald Tambs-Lyche (eds.) *People of the Jangal: Reformulating Identities and Adaptations in Crisis*. Delhi: Manohar, pp. 263-301.
2008. 「インドモダンのアレゴリーと瞑想する卵」川那部保明編集『ノイズとダイアローグの共同体』筑波大学出版会、97-136 頁。
2008. 「死者はなぜ語らない：降霊術師とケーララのもダニティ」『歴史人類』37 号 137-153 頁。
2009. 「クラティとカーリー：階層的な合目的性の袋小路と動く身体が繋ぐ考えられない系列」『歴史人類』37 号 67-101 頁。